

此
佈

昭和七年一月廿九日

大日本帝國海軍陸戰隊

右
譯
文

本陸戰隊の今次の行動は不逞の匪徒を根絶するにあつてその目的は決して良民を傷害するに非ず但し本隊を敵視し治安を擾亂する者は軍律に照し嚴罰を加へて許容する所なし、全市民衆は本隊の眞意を明鮮し虚動する所なく安らかに營業して可なり、茲に佈告す

昭和七年一月廿九日

大日本帝國海軍陸戰隊

軍令部歴史編纂部稿紙乙、花崎納

(8. 3 10.)

一
頁

2406

く 配備に就

各部隊は午後十一時五十分迄に夫れ夫れ左の如く待機の位置に就いた。

一、一區警備部隊 大西（謙次）大尉の率ゆる第五中隊（第二小隊缺）及曲射砲隊（長中尉鹽見三郎）は陸戦隊本部

二、四區警備部隊 石渡（貞良）大尉の率ゆる野砲隊は義勇隊兵舎

三、二區及三區警備部隊 鈴木（光信）少佐の率ゆる第一大隊第一中隊（長中尉土山廣端）第二中隊（長中尉山中傳吾）は第一線となり高橋（一松）少佐の率ゆる第三大隊第六中隊（長大尉土橋豪實）第

軍令部戦史編纂部稿紙乙 花崎納

- 七中隊（大尉太田静夫）は第二線となり左の如く
 北四川路上に配置す
- イ、横濱路方面へ進出の部隊第一中隊（長中尉土
 山廣端）（缺第一小隊）は實樂安路交叉點
 ロ、實興路方面に進出の部隊第一中隊の第一小隊
 （長中尉赤尾俊二）は桃山ダンスホール附近
 ハ、三義里、廣東街方面に進出の部隊第七中隊（
 長大尉太田静夫）は大達自動車ガレージ附近
 ニ、虹江路方面に進出の部隊第二中隊（長中尉山
 中傳吾）（缺指揮小隊及第三小隊）はアイシス
 活動寫眞館附近

ホ、鞆子路より北河南路方面へ進出の部隊第二中隊
指揮小隊（特務少尉本田又八）及第三小隊（特
少尉神谷濱次郎） 右同所

四、六區警備隊 第二大隊長（大尉多田野佐七郎）の率
ゆる第四中隊（長大尉福元義則）は狄^{デキ}思^イ威^イ路^ロ上^上行^行同^同
路との交叉點附近

五、七八區警備部隊 大井中隊（長大尉神川武夫）安宅
小隊（中尉飯田美照）は日本人俱樂部

右の外直に配備に就きたるは西部警備隊として

六、吉元（家彦）大尉の率ゆる第三中隊（缺第二小隊）
は水月俱樂部 第二小隊（長中尉小笠原葦彦）は豊

田紡に配備す

及左の東部警備隊であつた

七、東島（清）大尉の率ゆる第三〇驅逐隊陸戦隊中隊は

公大社宅に配置

八、第五中隊第二小隊（長中尉塚本昇）は公大第一工場

九、深見（盛雄）大尉（皐月）の率ゆる第二十二驅逐隊

（一水戦）陸戦隊一ヶ中隊は大康社宅に本部を置き

東部一帯を警備す、

と言ふのであつた。

かくて中央警備部隊は午后十一時五十五分陸戦隊指揮官の命により各隊其待機位置を進發して豫定の配備線に就

軍令部編纂部編纂部稿紙乙 花崎納

一般経過

かんとした、然るに其途上に於て敵の便衣隊及正規兵の射撃を受け、茲に我軍も^決断然として之に應戦したのである、第一の銃火は正に一月二十九日午前〇時〇分！此日此時は最も記念せらるべき時である。

二月二十九日の戦闘

線

一區、二區、三區警備の各部隊は守備縣に就かんとして到る處に頑強なる敵の抵抗を受けた、

わが軍が最も悪戦苦闘をしたのは第三大隊が進出した廣東街三義里方面であつた、上海に到着したばかりで地理に不案内の第三大隊が初めての暗夜の行動に於て警戒配備の任務を遂行するさへも困難なるべしと想像されたが、

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

加ふるに豫期せざりし敵の堅固な防備に向て突進した其の苦戦と奮闘とは實に言語に絶するものがあつた、然し遂に天明に至つて敵壘を占領することが出来た。

尙激戦を交へたのは第一大隊第二中隊の主力が進出した
 虻江路^{キウコノ}方面であつた、敵は堅固な土囊陣地を構築し且つ
 北停車場方面より装甲列車砲の協力を得頑強に抵抗した
 が、我中隊の猛烈果敢な突撃と迂回運動とによつて午前三
 時十五分に之を占領することが出来た。

寶興路^{バウシロ}方面に於ては巧妙な危襲的突撃を行つて敵陣地を
 占領し多少の兵器をも鹵獲することが出来た。最も痛快
 であつたのは一區警備部隊の働きであつた、自衛上必要

軍令部編纂部編纂(花崎納)

(8. 10.)

な軍事行動を行ふ爲め鐵道線路を越へ虹口クリークの線
 迄進出した、數段に構へた敵土囊陣地を逐次占領して進
 出したが中にも大西大尉は壯絶なる格闘戦を演し、日本
 刀の切れ味を如實に敵兵の頭上に證するを得た、また銃
 劍術の腕の牙えを存分に實證することを得た、斯くて近
 代科學の戦闘場裡にも尙昔ながらの武勇談を聞くの思が
 ある、また敵陣地に放火せんとして身を挺して突進し、敵
 の手榴彈の爲め僅かに一塊の肉片を止めて壯烈なる戦死
 を遂げたものもあつた、また最左翼の砲子路方面に於て
 は至近の巨艦に手榴彈戦を現出し、多數の敵守備隊を目前
 に全滅せしめたる如き場面もあつた、のみならず後方警

軍令部戦史編纂局稿紙乙
 花崎納

當日の陸
戦隊兵力

備の各隊は到る處の路次家屋より便衣隊の射撃を受け之が掃蕩には一方ならぬ苦心をした、之を要するに當日の戦闘は我海軍が未だ嘗て経験しない初めての市街戦を現出し其苦闘と苦心とは豫想外のものがあつた、また便衣隊の爲めに少からず惱まされた、それ等の状況に就ては次に委しく述べたいと思ふ。

當日現在の我陸戦隊の兵力は在來の第一第二大隊約千三百五十名に當日到着せる第三大隊四百三十名を加へ千七百八十名であつた、また主要兵器は

装甲車九台 五纏及八纏野砲合せて八門
曲射砲四門 機銃車十一台

司令部戦史編纂部秘蔵
花崎納

であつた。また艦船部隊より揚陸せる陸戦隊は左の如くであつた

二十八日午後十時頃より上陸したる部隊

十五驅逐隊 一ヶ中隊 (大尉原口 昇) 一〇九名

常 磐 一ヶ中隊 (大尉米原壽雄) 一四六名

安 宅 一ヶ小隊 (中尉飯田美熊) 三五名

大 井 一ヶ中隊 (大尉神川武夫) 一〇五名

夕 張 一ヶ中隊 (大尉二神延二) 八九名

尙二十九日午前一時頃より上陸せる部隊は

常 磐 一ヶ中隊 (大尉仲 繁雄) 九六名

安 宅 一ヶ小隊 二三名

軍令部戦史編纂部稿紙乙 花崎納

三〇驅逐隊 一ヶ中隊（大尉東島 清）一七二名
 二十二驅逐隊 一ヶ中隊（大尉深見盛雄）一一七名
 二十三驅逐隊 一ヶ中隊（大尉中尾熊太郎）二三九名
 尙同日午前五時頃より上陸せる部隊は
 常 盤 一ヶ小隊
 であつた。

此等の陸戦隊は西部警備地區にありしものの外戦闘進捗に應じ火線の急を聞いて馳け付けたるものありまた、便衣隊の掃蕩に任したるものあり、三義里及花園街方面に於けるが如く狭少面の火線に一時多數の所屬部隊伍間に

た₃正

軍令部戦史編纂部稿紙乙 花崎納

十七十六名トモト

(8. 3 10.)

花園街並
青雲路方
面

車列交錯して協力したるものありて、二十九日正午以後同
 日午前に至る期間に於ては警備地區行動場面等に就ては
 判明せざる部もあつた、其大要は次項に之を述べやうと
 思ふ。
 陸戦隊本部を含む警備區即ち第一區は其西側は湊瀨鐵道
 を以て限られてあるが、天通庵驛の如きは陸戦隊本部を
 去る僅かに百米に過ぎない、従つて坐して此方面を放置
 せんか敵の銃火は直に本部に向て注がるべく我陸戦隊に
 對する最大の脅威を與ふるものである、六三園方面に於
 ては我居留民の多數が花園街一帯に居住して居るから現
 地保護の原則上之も放置することは出来ない。

司令部戦史編纂部稿紙乙二花園納
 子

(8. 3 10.)

自衛行動

第五中隊
の行動

事起らずして無事の間、共同防衛の配備に就くことが出来たならば問題は無いが、一旦他の方面に於て支那兵と銃火を開くに至つた以上、自衛手段としてそれ等の地區に進出し、之を我手中に確保すべきは當然のことであつた。

第一區警備の任にありし第五中隊が青雲路、花園街方面に進出したのは斯かる事情の下に當然の處置であつた。命を受けた第五中隊長（大尉大西謙次）は左の要旨の命令を下し、第一、第二小隊（第二小隊は公大に在り）をして路を分つて進出せしめ、同濟路にて會合し、更に花園街と青雲路との兩方面に守備線を張らしめんとした。中隊命令の要旨（敵情等の項略す）

甲午の戦史編纂部稿紙乙（花園街納）

十カ所

一、第一小隊（長中尉中村省三）機銃小隊（長特務少尉吉本勝喜）の一部及装甲車（第八號）は陸戦隊本部を出發江灣路より大東街の踏切を越へて六三花園前に出で大東街を進み同濟路との交叉點に出でて第三小隊と會合し、聯絡終らば引返して六三花園方面の守備に任すべし

二、第三小隊（長少尉藤田淳）（缺第三分隊）及装甲車（第九號）は陸戦隊本部を出で天通庵驛踏切を越へ同濟路を進み大東街との交叉路に至り第一小隊と會合し、聯絡終らば青雲路方面の守備に任すべし

三、指揮少隊（長兵曹長萩岡秀一）機銃小隊の殘部及第

軍令部戦史編習原稿紙乙（花崎納）

三小隊の第三分隊は豫備隊となり本部に位置すべし
 四、中隊長は陸戦隊本部に在り。

各部隊は命に従つて進發し各任務に就いた。中村中尉は
 第一小隊及機銃、装甲車を率ゐ大東街の踏切を越へ六三
 花園前に到つたが途中敵影を見ず、只六三花園に隣れる
 公安局に於て數名の巡捕が我隊の行動を見反抗の氣勢を
 示したるを以て武装を解除した、而して同済路との交叉點
 に達し敵の土囊陣地を占領した時は午前〇時十分であつ
 た。他方藤田中尉は第三小隊の三ヶ分隊及第九號装甲車
 を率ゐ、本部を發し天通庵驛踏切を通過して同済路を進
 み大東街との交叉點に至り何等の抵抗を受けずして第一

軍令部戦史編纂部松本乙(花崎納)

小隊との聯絡を取ることが出来た。

茲に於て第一小隊長（中村）は四又路の守備を第三小隊（藤田）に引渡し大東街を引返し六三花園に至り其西北方に陣地を構築した。中隊長（大尉大西謙次）は之より先き機銃車に乘し各隊進出の状況を視察すべく先つ天通庵驛に至り第三小隊の状況を見更に轉して六三花園方面より大東街を西進し同濟路との交叉點に來つた、而して此地點に於て藤田第三小隊長より状況の報告を得た。折から（〇時三十分頃）青雲路及横濱路方面より敵の射撃を受けたので大西中隊長は戰車をして前進せしむると共に第三小隊第二分隊の兵六名を率ゐ十字路の一家屋を

平谷源藏史編纂部編輯
花崎納

大西大尉
敵陣地に
斬込む

占據し前方を窺ひたるに、青雲路同済路交叉點附近には土
囊陣地ありて敵之に據り盛んに射撃を行へるを望見し、
然之を占領せんことを決心した。

依て大西大尉は先登となり同家屋の裏門より同済路に出
て該六名の兵を率ゐ戦車の蔭より道路の左側に沿ふて潛
行し敵土囊陣地に突入した、大西大尉は日本軍刀を振つて敵

兵一名を斬り續ける兵は銃剣を以て七名を刺し敗走する
殘餘の敵を追撃して青雲路を進み虹口クリーク岸横濱路
に達し、路傍に散兵隊を布置し對岸の敵壘に對峙した。

此時藤田小隊長來着したるを以て大西中隊長は花園街方
面を視察すべく去つたが、間もなく第十五驅逐隊陸戰隊

軍令部戦史編纂部編纂乙、花崎納

福角一水
の武勇

の蓼沼（三郎少尉）小隊が來着した。

此時先頭に在つた一等水兵福角夏郎は横濱路（虹口クリ
ーク岸）に進出し其路次内に敵數名機關銃を擁せるもの
あるに遭遇し直に躍り入り三人を刺した、他の敵は其猛
威に恐れをなして逃走したので機關銃を鹵獲し一先づ狀
況報告の爲め藤田小隊長の元に趣かんとしたるとき蓼沼
少尉は其場處に到着し其手によりて機關銃は陸戦隊本部
に送られた。

〔附記〕大西（謙次）大尉が率ゐて同濟路青雲路の交
又點にある敵土囊陣地に切込んだのは左記六
名の兵であつた。

軍令部戦史編纂部稿紙乙 八花崎納

2423

一等水兵	福 ^{フク} 角 ^{カク} 夏 ^カ 郎 ^{ロウ}
二等水兵	岡 ^{オカ} 村 ^{ムラ} 茂 ^{シゲ} 登 ^{トク}
同	法 ^{ホウ} 喜 ^キ 武 ^ブ 治 ^チ 郎 ^{ロウ}
同	内 ^{ウチ} 田 ^タ 貞 ^{サダ} 美 ^ミ
三等水兵	田 ^タ 中 ^{ナカ} 武 ^ブ 一 ^{イチ}
同	中 ^{ナカ} 村 ^{ムラ} 勝 ^{カチ} 美 ^ミ

装甲自動車の蔭から忍び寄つた際は先登の大西大尉に續いて岡村、次で法喜と云ふ順で福角一等水兵は殿であつた、敵陣に躍入つた際大西大尉は敵一を斬り岡村は三人を刺し他は各一を刺殺した、福角は遂に逸して一人も刺

甲午戦争史編纂部編纂乙(花崎納)

第十五驅逐
隊陸戰隊

さなかつた、

陸上の戦闘に於て剣道と銃剣術の練達した腕
を持つて居ることは絶対に必要なことである。

第十五驅逐隊は正午林（紫郎）大尉の率ゆる蔦、藤の陸
戦隊を揚陸し日清汽船及三菱商事構内を警備した、次で
午後九時四十五分命により原口（昇）大尉の率ゆる萩、
薄の陸戦隊（一〇九名）を揚陸し同中隊は午後十一時四
十五分陸戦隊本部に到着、陸戦隊指揮官の指揮下に入つ
た、而して第一小隊（長中尉原田稔）は本部附近の守備
警戒に任し、第二小隊（長小尉藤沼三郎）は豫備隊とし
て本部に待機して居つた。

軍令部戦史編纂部編纂
花崎納

青雲橋の
戦闘

このとき青雲路方面に戦闘中の第五中隊（長大尉大西謙次）を救援すべき命を受け、蓼沼少尉は直に第一線に向つて本部を出発した（午前〇時三十分）途中敵弾は連りに飛來し一等機關兵山本一三之が爲に微傷した、同濟路青雲路交叉點に至つて第五中隊長の指揮下に入り左折して青雲橋に向ひ横濱路に至りしところ敵機銃陣地を發見し福角一等水兵と共に敵を驅逐し機銃を鹵獲したのであつた。藤田小隊は青雲橋の手前道路右側の積石を小楯として散開しクリーク對岸の敵と對峙中、蓼沼小隊の應援を得た、然るに對岸の敵は土囊陣地及二階建の家屋に據り盛に我を瞰射するのでどうしても進む事が出来ない、そこ

平今、戦史編纂部、機銃乙、花崎納

で藤田中尉は此の家屋を焼き拂はんと決^心した。

小隊長は決死隊を募つたが直に命に應じて六名の者が進み出た、而して古山（政夫）兵曹を先登としやがて彼等は敵陣に突入したのである。敵は機關銃、手榴弾及小銃火を集中した、見る見る中に古山兵曹は倒れ、他の四名は重傷を負ふた且つ敵の據れる家屋は煉瓦造りの堅固な家で放火要具も其用を爲さざるを發見し、遂に一同は憾^を飲んで引返すこととなつた、對戰中藤田中尉は貫通銃創を受けたが之に屈せず對陣中午前二時半頃に至り陸戰隊本部の命により藤沼小隊と共に退いて同濟路大東街交叉點に陣地を固め、午前十一時三十分更に鐵道線路迄後退した。

軍令部歴史編纂原稿紙乙（花崎納）

萩岡小隊（長兵曹長萩岡秀一）は本部に在つて豫備隊となつて居つたが大西中隊長の招致の命に接し直に馳せて同濟路大東街の交叉點に至つたが、盛んに横濱路方面より射撃を受けた依て八號装甲車と共に左折して大東街を西進し數段に構へたる敵土囊陣地を奪取し（敵現^{は既に}に逃去しありたり）横濱路迄進出したが、後命により第三小隊（藤田）に合し行動を共にした、
 第一小隊（長中尉中村省三）及第四小隊（長特少尉吉本勝喜）は六三花園方面に進出し午前二時三十分頃六三花園西方隅及花園街方面に防禦陣地を構築したが後命により鐵道線路迄後退した。

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

〔附記〕一、青雲橋右岸の敵陣地（家屋）を焼討せんと

して突入したのは

三等兵曹 古山政夫

二等水兵 中田一查

同 西田常一

同 池田久松

三等水兵 田淵實

同 廣瀬武

の六名であつた、午前二時古山兵曹は身を挺して先登に進み他の五兵は其後に随ひ池田二水は陸戦隊本部より自轉車にて石油罐

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

三四頁

(8. 3 10.)

を運び其儘橋を渡りて敵陣に突入した、敵
 は決死隊の突入を知るや小銃機銃手榴弾を
 雨注して防禦した、我決死隊は之を物とも
 せず奮戦したが、敵の土囊陣地は絶壁の如
 くにして且雨に濡れ登攀する能はず家屋は
 石造にして點火する能はず、其中古山兵曹
 は敵弾に當りて先づ斃れ、中田、田淵の兩
 名も相次て重傷を受け苦戦言語に絶するも
 のがあつた、依て藤田小隊散開位置迄退
 せんとし、西田二水は古山兵曹を背負ひ橋を
 渡らんとしたるとき敵弾の爲めに諸共に倒

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

れ危険刻々に迫りしを以て他の二名は此状況を小隊長に報告せんとし辛ふして歸隊した、然し古山兵曹の死体は遂に收容するを得ず行方不明となつた。

其後三月三日開北占領後に至り古山兵曹奮戦の跡を搜索したるに血染の手旗袋、袴下軍服片及脚絆掛けの片足を瓦礫の間に発見し見る人をして暗涙に咽ばしめ當時苦戦の状をしのばしめた。

三、此方面の戦闘に於ける本日の死傷者は左の

如左
如左

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

二大	二等兵曹古山政夫（戦死）青雲橋にて
野砲隊	三等兵曹田崎松次（戦死）高等女學校にて
機銃車	一等水兵前後丑雄（戦死）六三花園側にて
二大	少尉 藤田 淳（負傷）青雲路にて
二水	中田一壹（重傷）青雲橋にて
同	西田常一（ ）右 全
三水	田淵 實（ ）右 全
同	廣瀬 武（ ）右 全
一水	佐近誠一郎
光石秀雄	
二水	東 好

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

(8. 10.)

<p>面 横濱路方</p>	<p>二水 藤森 晃</p>
<p>小倉武男</p>	<p>川田義光</p>
<p>三水 北濱松作</p>	<p>(十五驅) 一機兵 山本一三 (微傷) 同濟路にて</p>
<p>二曹 安田吉次郎 (重傷左胸部貫通銃創)</p>	<p>青雲路にて</p>
<p>三機曹 高岡清治 (重傷)</p>	<p>二水 矢野重博 (負傷)</p>
<p>第一大隊第一中隊長 (中尉土山廣端) の率ゆる指揮小隊 (長特務少尉鈴木惣三郎) 第二小隊 (長特務少尉仲地幸</p>	

軍令部戦史編纂原稿紙乙 (花崎納)

(8. 3 10.)

二) 及第三小隊(長特務少尉本田増吉)は北四川路上の待機位置を進發して寶樂安路を進み、横濱路に右折すると間もなく鐵道踏切に構築せる敵土囊陣地より射撃を受けた(午前〇時五分)。

敵彈雨下の間に尖兵は鐵條網を除去し後續部隊は其通路より前進しつゝ敵前三十米突に迫つた、而して一時に機銃、小銃の猛射を開始し未だ午前〇時三十五分第二小隊長(特務少尉仲地幸二)は突撃を命じ遂に敵陣地を占領した、幸に一名の死傷者をも出さなかつた、而して陣地を確保すべく午前六時より土囊陣地構築を開始し午前八時に至り完了した。

軍令部戦史編纂部稿紙乙(花崎納)

面 寶興路方

第一中隊第一小隊長（長中尉赤尾俊二）は第一小隊及第四號装甲車を率ゐ北四川路上桃山（ダンスホール）附近を出發して寶興路に進出したが間もなく前方路上に鐵條網の布設しあるを發見し決死隊を以て之を除去せしめ敵彈雨下を物ともせず之を決行した、此作業中一等兵曹下齒武雄は敵彈の爲め胸部貫通銃創を受け重傷を負ふた。

先頭に在りし装甲車（第四號）は鐵條網の破口より前進して敵陣地に肉薄したが更に第二の鐵條網に拒止された、小隊長は直に決死隊に命じ此鐵條網除去を命じたが彼等は直に身を挺して除去作業に従事し敵彈雨飛（兵中）の下に困難なる作業を敢行した、然るに敵彈愈激しくして斃るゝ者

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

相次ぎ到底成功の望無きが如くに思はれたので小隊長は一時此等の作業を中止せしめんとしたるが、暗黒裡に銃聲轟々として命令前線に達せず其内決死隊は遂に第二の鐵條網を~~破~~壊して進路を開いた。

〔附記〕此除去作業に従事した決死隊は左の七名であつたが内牧瀬、岩城の兩名は壯烈なる戦死を遂げ松島、小崎、坂本の三名は傷き、伊藤、栗林のみは無事であつた、以て如何にこの作業の困難なりしかを語るものである。

- 一 曹 伊藤 清
- 一 水 牧瀬 庚太郎 (戦死)

軍令部戦史編纂部稿紙乙(花崎納)

8. 3 (10)

一 水 岩城誠二（戦死）	一等機關兵 松島直一郎（負傷）	二等機關兵 小崎薫（右全）	三等水兵 坂本徳平（右全）	同 栗林甫	<p>斯くして造られた一條の血路を突破して機銃は敵陣^{（至近の}に近^{距離}に進入した、また装甲自動車は手榴弾兵を搭せて敵陣に肉薄した、小隊長（中尉赤尾俊二）は自ら先登に立ち手榴弾を以て敵兵目かけて之を投じた、此の肉薄戦闘の間に尖兵は鐵道踏切の鐵門の固縛を解き、次で其内部にありし鐵條網を切開き、次で戦車は更に線路迄</p>
--------------	-----------------	---------------	---------------	-------	--

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

(8. 3 10.)

敵は死体
兵器を遺
棄して逃
走す

突進し決死隊は敵の土囊陣地に突入した、之に續いて小隊は進撃し遂に完全に之を占領したのである。時に午前一時であつた。

〔附記〕此土囊陣地を守備して居つた敵は排長（小隊長級）の指揮する一部隊なりしものの如く陣地内には拾個の死體が遺棄されてあつた、内一個は排長であつた、その外重機關銃二門、輕機關銃一門、ベルグン拳銃一挺、小銃四挺と彈藥若干とを鹵獲した

占領後小隊長は敵の土囊を利用して陣地構築を命し、更に午前六時に至つて陸戦隊本部より土囊の供給を受け午前

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

(8. 3 10.)

廣東街、
三義里方
面

第一日の
最悪戦

八時迄に克明路寶興路との交叉點附近に堅固なる陣地を完成することが出来た。

第一日の戦闘に於て我陸戦隊が最も悪戦苦闘したのは廣東街より三義里に亘る戦闘であつた。

當日午後上海に到着したる佐世保第二次特別陸戦隊は上陸して北部小學校の宿舍に入るや上海陸戦隊指揮官の麾下に入り第三大隊（長少佐高橋一松）に編入せられた。大隊は陸戦隊命令に基き第一線部隊たる第一大隊（長少佐鈴木光信）の後方に在りて内方警戒に任ずる豫定であつた、而して大隊長（高橋三松）少佐は此任務に依り第六中隊（長大尉土橋豪實）を第二區（寶興路以北）の

軍令部戦史編纂部稿紙乙（花崎納）

警備に第七中隊（長大尉太田静夫）を第三區（第二區の以南）の警備に當らしめた。

此の大隊命令に基き第七中隊長（太田大尉）は第一小隊（長中尉岡村武男）及機銃一個分隊をして廣東街に進出せしめ、第二小隊（長特務少尉竹山安次）をして三義里方面へまた第三小隊（長特務中尉吉廣仁三郎）を袍子路方面へ進出せしめ第四小隊（長少尉近藤忠兵衛）機銃小隊（長兵曹長古畑悦藏）（缺一分隊）指揮少隊（長兵曹長佐井川新一郎）及装甲自動車を豫備隊として大連附近北四川路上に控置することとした。

斯くて○時○分發進の命令により地理不案内の大隊各部

軍令部戦史編纂局秘紙乙（花崎尉）

隊は暗黒の中に行動を起した、大達附近に待機して各小隊進出の状況を注意して居つた第七中隊長（太田（静夫）大尉）が最初に前線戦闘の状報を受領したのは○時十五分左翼に隣接せる第一大隊第二中隊が虬江路方面に於て苦戦に陥つたとの報であつた、太田中隊長は此報に接するや直に第四小隊（長内山少尉）及装甲車を派遣して友隊の援助に赴かしめた、然るに次の瞬間には自己受持の正面廣東街方面がより一層の苦戦に陥るに至らんとは神ならぬ身の知る由もなかつた。

午前○時二十分頃（開カヤノ）鄭家橋路より右折して廣東街に進出した第一小隊（長中尉岡村武男）は突如として前方鐵道線

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

近藤少尉
戦死

路方面よりまた左右の家屋より集中射撃を受け忽ちにして苦戦に陥つた、時恰かも細雨霏々、暗黒咫尺を辨せず隘路の如き廣東街は突然^{ふた}凄惨なる修羅の巷と化した。

岡村中尉は敵の射弾に屈せず第一小隊及機銃一分隊を率ゐて躍進し先つ右側附近の敵を撃^核滅しつゝ道路の右側に密接しつゝ攻撃前進し敵陣に肉薄した。

是より先き「第一小隊は死傷續出、苦戦中」の報を得た、第七中隊長（太田大尉）は直に第四小隊（長少尉近藤忠兵衛）指揮小隊（長兵曹長佐井川新一郎）及機銃小隊（長兵曹長古畑悦藏）を進出赴援せしめた。

近藤少尉は命を受けて自ら隊の先頭に立ち弾雨を冒し、

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

戦友の屍を越へつゝ、廣東街左側に沿ひ前進すること約十五米にして、忽ち敵弾來つて左胸部に命中し「残念！」の一語を残して名譽の戦死を遂げた、時に午前一時頃であつた。

一方岡村（武男）中尉の率ゆる尖兵は前進する内に敵の鐵條網に遭遇した、茲に於て岡村中尉は第一小隊第一分隊下士大谷（萬次郎）二曹、柳田（知章）二水、山本（義美）三水等に之が破壊を命じ、他方機銃を前線に招致して援護射撃を行はしめた。

大谷兵曹等三名は敵銃火を冒し鐵條網の除去に着手したが切網鉄の用意なく已を得ず銃創を以て鐵條を一本宛打

平定縣戰史編纂部編纂
花崎納

(8. 3 10.)

天皇陛下
萬歳

ち切るの外はなかつた、折から敵は盛んに小銃機銃を發射し手榴彈を投し之を妨害したが、其の炸裂の閃光裡に彼等の必死となつて作業しつゝある有様を認むることが出來た、實に悽慘とも勇猛とも評する辭なき程であつた。斯くて僅かに鐵條網は左方の固縛部を切斷するを得茲に一路の進出路を開いた、小隊は勇躍して前進し匍匐膝行して敵陣に迫つた、最早敵との距離僅かに數米而かも何等の遮蔽物もない、敵火の正面に曝面して此處迄進出せるが僅かの間に見る見る我兵は多大の損害を受けた、死傷相次で生じ進^むの殆んど倒れざる無き有様であつた。暗黒の中に敵彈を受け「天皇陛下萬歳！」を叫んで倒る

甲午海戦史稿(1) 第10巻 北時納

るものがある、また敵の手榴弾に銃器を破壊せられ「残念ダ！ 鐵砲ヲ貸セ！」と叫ぶ者があつた（二水服部重樹）之に對して下士官の聲と覺しく「負傷者ノ銃ヲ執レ！」と叫ぶものあり、先の兵は「オイ銃ヲ貸セ！」と重傷の一兵（一等水兵大村一三）より銃を取らんとすれば、瀕死の状態に在りし彼はムツと起上り「馬鹿！ 俺ハ今カラ撃ンダ！」と射撃の姿勢を執つたが力絶えて間もなく「天皇陛下萬歳」を叫び率然として斃れた。

此悲壯なる惡戰苦闘（にひるます）は層一層志氣（は）を百倍せしめ自余の兵は前進肉薄を續け遂に〇時二十分頃敵の前進小土囊陣地を占領した、然し此陣地は僅かに數名を容るゝに足るの

軍令部戦史編纂部編纂
北畠納

みて而かも敵第二陣地との距離十數米に過ぎず、土囊を小楯に採つて射撃せんとした機銃は二度迄も敵の手榴弾に破壊せらるゝ狀況であつた。

是より先き大達附近に在つた太田（靜夫）中隊長は前線苦闘の報告を得るや、その頃第六中隊より應援に來つた同中隊第二小隊（長少尉内山登）を三義里方面へ派遣し、また次で來着した常盤の小林小隊（長中尉小林宜光）を大達附近に待機警戒に任せしめ、自ら本隊（第四小隊、指揮小隊機銃小隊）を率ゐて進出した。

廣東街に出ると敵弾は盛んに耳をかすめて飛來した、中隊長は此危険の狀態を直覺して

平谷の戦史編者 編輯乙 花時納

「逐次各個に躍進！」「左側の死角に寄つて進め」

との命を下したが、此の瞬間に敵弾飛來して附近には相次で斃るゝもの續出し暗中に夫れが誰なりしかしかと見定むることすら出來なかつた。太田中隊長は死屍を越えて前線に進出し遂に第一小隊長の位置に來つて戦闘を指揮した。他方三義里方面の戦闘は先つ初め右翼部隊として派遣された第七中隊第二小隊（長特務少尉竹山安次）によつて火蓋を切られた、竹山小隊は大連附近を出發すると、大德里方面の小路次に入り便衣隊を掃蕩しつゝ上海日々新聞社前を出て三又路に出ると敵より射撃を受けた、そこで竹山小隊長は射線を避けて三義里内に入り敵

軍の戦況を伝える
北時納

内山少尉
戦死

陣地を側面より攻撃せんことを企てた。

此頃第六中隊第二小隊（長少尉内山登）が應援の爲め三義里門前に到着したが、忽ち敵の射撃を受け先登に在りて小隊を指揮しつゝあつた内山少尉は腹部に敵弾を受け其地點に斃れた、少尉は無念の涙を押へつゝ部下をして竹山小隊に合同するを命し間もなく絶命したのであつた。依て第二小隊は三義里に遣入り竹山特務少尉の指揮下に入り一邦人の案内に依つて是より西方に進出し一個の支那家屋を占領し屋上、二階及地階の三段に火線を布いて敵の側面より攻撃を開始した。

敵は此不意の射撃に狼狽措く所を知らず前進士囊陣地を

軍令 戦史編纂部 乙 花崎納

2448

棄てて鐵道線路西側の炭小屋に退却し、機關銃を以て我に應戦した、此戦闘に一等水兵大島音義及二等水兵森田朝則は共に頭部に敵彈を受け名譽の戦死を遂げた。

午前一時頃第三大隊長（少佐高橋一松）は前線危急の報を得て五號裝甲車に搭乘して中隊長（太田大尉）の所へやつて來た、而して敵前十數米の位置迄進出し敵と猛烈なる銃戦を交換した、敵彈の裝甲車に命中する音響はさながら豆を煎るが如く間斷なく耳を撃つざいて聾せんばかり、裝甲車の二挺の機銃も亦火を吐いて敵陣を猛射した。ところが余りの接戦に敵機銃彈の命中五百余發に及び其中二彈は裝甲を貫いて車内に入り破片を以て裝甲車長谷

大
隊
旗
に
敵
弾
を
受
く

部（傳）特務少尉及高橋第三大隊長を傷け且つ二挺の機
關は破損して用を爲さざるに至つた、そこで装甲車は再
び大隊本部に引揚げた。

此行動中大隊旗手一曹柿本鶴松は装甲車の外側に立つて
大隊長と行動を共にしたが大隊旗には敵弾四個を受けた
るに不拘旗手は微傷だにも負はなかつたのは奇績であつ
た。翻つて廣東街正面の戦況を見るに太田中隊長は辛ふ
して小數の部隊を指揮して前面の敵と指呼の間に相對し
て銃戦を交え居りしも正面よりの突撃は效を奏するの目
算なく連りに「動クナ！、暫ク我慢セヨ！」と激勵しつ
ゝ敵若し逆襲に轉せば白兵戦を交へて切り死すべき覺悟

軍令部編纂部編纂
孔崎納

をなして各兵に命令したのであつた。

このとき左翼砲子路方面に派遣された第三小隊（長特務中尉吉廣仁三郎）が本隊の危急を聞いて中隊長の位置へ馳せ付けて来た、小隊が耶家橋路を東進して廣東街へ左折すると屋上から手榴弾を投げ付けられました正面よりは盛んに射撃を蒙つた、吉廣小隊長が先登に立つて廣東街を前進して中隊長の位置に進む迄に六七名の死傷者を生ずるに至つた、このとき太田中隊長は側面より敵を脅威して局面を打開するより外途なしと認めたと、そこで今到着した吉廣小隊をして右翼に出でしめんとして「第三小隊は前進！右に出で敵を側撃せよ」と命じた、令に應じ

軍令 戦史部 花崎納

て吉廣小隊長は立つた、小隊員を麾いて先登に立つて突進した。續く小隊員は一人、二人三人……僅かに十名、敵前に迫ること十數米の所に至つて鐵條網に阻まれた、敵前の鐵道線路を小楯に取つて敵に對抗しやうとしたところ線路は平地に在る、何の掩蔽にもならない、それで驚ぐらに敵の火線前十米の所を横過して三義里に躍進した、危険、危険と心配した中隊長の目前を無我夢中で馳せて行つた。斯くして第二小隊と合同することが出来、第二段の行動に移つた、そこへ第六中隊の機銃小隊（長特務少尉岸川郡八）が應援に馳け付けて來た、然し據るべき陣地がなかつたので後方僅かの死角に待機するの外は

平合 戦史 鐵道 掩蔽 花崎 納

なかつた。岸川少隊長は遂に此戦門で重傷を負ふた。この頃敵陣地の左翼後方に當つて一條の火光が揚つたと見ると、見る見る中に火災となりパツと燃え上つた、之が爲めに廣東街一帯の我が状況は白晝の如く照されて全く敵眼に曝露された、敵は此機會とばかりに盛んに銃機銃を打ち出した、是より先き右翼に廻つた第三小隊長（吉廣（仁三郎）特務中尉）は三義軍（里）に入つて先着の内山小隊（小隊長は既に戦死）及第二小隊（長特少尉竹山安次）と合同し之を指揮し、敵の左翼を射撃したが尙前方に進出し先つ前方の家屋を焼討せんことを企て決死隊を募つたが左の三名は聲に應じて志願して出でた。

平金三郎戦史編下巻稿紙乙 花崎納

二等水兵 中間 時 義

二等機関兵 渡邊 一雄 (重傷)

三等水兵 樋口 清美

三名は鐵道線路を越へて進出し敵の據れる家屋に火を付けた、然るに該家屋は炭其他の燃料を貯藏せる家屋であつた爲め忽ちパツと燃え上り四邊をして白晝の如くならしめ、敵の動作も判然と見ることを^{が出来}得た、そこで三義里部隊は敵に猛射を浴せしめ次て竹山小隊長は進出して敵陣の一部を占領した。

この火災は午前四時頃に鎮火した、この頃二神 (延三) 大尉の率ゆる中隊 (二個小隊^及機銃小隊) が來援した、而し

て第二小隊は廣東街上左側に一大家屋のあるに氣付き之を占據して其三階に機銃を運び敵陣を瞰射する位置に火線を布いた、此家屋は其後我主要なる防禦點となつた道岐峰公義學堂であつた。

次で中尾（熊太郎）大尉の率ゆる第二十三驅逐隊陸戰隊一ヶ中隊も廣東街に來着した、また野砲一門も陸戰隊本部より派遣された、然し孰れも狹隘な正面の戦線に参加すること能はず、後方便衣隊の掃蕩に従事せしむるの外なかつた、午前四時過に至つて初めて彈藥補充用のトラックがやつて來た、そこで之に死傷者を收容せしめた、同時に待ちに待つた土囊を運んで來た、自動車は彈丸飛來

軍令部戦史編纂部編纂 稿紙乙 (花崎納)

土囊來る

する廣東街に進出することは出来ないので耶家橋路交叉
 點で停め、土囊は伏^卧姿勢して居つた列兵によつて手送りで
 前線に運ばれた、之によつて我が軍の前方に初めて土囊
 陣地を構築することが出来た、此の新陣地には應援に來
 た機銃を進め敵と對抗した、天明に至つて正面の敵は我
 左翼逍岐峰公義學堂の三階二階の夕張陸戦隊の瞰射と三
 義里方面よりの側射とによつて遂に退却するに至つた。
 斯くて夜は明け午前八時頃に至つて敵は全く沈黙し、次で
 我が飛行機よりの爆撃によつて敵に多大の損害を與へ遂
 に完全に廣東街の陣地を占領することが出来た。
 此戦闘に於て近藤（忠兵衛）少尉加茂（正巳）一水、辻

軍令部歴史編纂部編纂
 花崎納

面 虬江路方

(榮) 一機大村(一三) 二水、江田(進) 二水、山田(良藏) 二水、服部(重樹) 二水、野副(靜) 三水、(以上三大隊) は廣東街に於て戦死し内山(登) 少尉、大畠(晋義) 一水、森田(朝則) 二水、(以上第三大隊) 木原(好夫) 一機、永岡(盛延) 三水、(以上常磐) は三義里に於て戦死を遂げた、また岸川(郡八) 特務少尉、岡村(武男) 少尉、佐井川(新一郎) 兵曹長其他重軽傷者四十六名を出した、以て激戦苦闘の状推して知るべしである。

虬江路、鞆子路方面即ち第三區の警備に任せられた第一大隊第二中隊(長中尉山仲傳吉) は、兵力を二分し一は

平谷、戦史編纂部編纂乙、花崎納

第一小隊（長中尉吉松田守）第二小隊（長特務少尉阪口
 繁太尉）及機銃車を以て虬江路に進出せしめ他は中隊長
 自ら指揮小隊（長特務少尉本田又八）第三小隊（長特務
 少尉神谷濱次郎）及装甲車一臺を率ゐて砲子路より北河
 兩路に進出した。

虬江路に進出した第一第二小隊は北四川路上アインス活
 動寫眞館前より虬江路に入り前進の途中赫ハ司ス克ケ而ル路ロ十字
 路附近にて屋上より便衣隊の射撃を受けた、吉松中尉は
 直に之に反撃を命し乍ら尙も前進を續けると約百米を進
 んだ頃前方に鐵條網の布設しあるに遭遇した、尙時尖兵此
 長たりし宮越（光義）二等兵曹は直に躍進して垂水（忠

軍令部戦史編纂原稿紙乙（花崎納）

雄)一等水兵及藤澤(重雄)一等機關兵と共に鐵條網の破壊に従事した、敵は此時既に我が部隊の進出を知り鐵道線路附近の土囊陣地に據つて盛んに猛射を浴せ掛けたが、宮越兵曹は彈雨の下に身を挺して破壊作業に従事し遂に一道の通路を開くことに成功した、その刹那午前〇時十分敵の一彈飛來して胸部を貫き壯烈なる戦死を遂げた。垂水一水、藤澤一機も亦殆んど同時に重傷を負ふたが、此等三勇士の奮闘によつて遂に進出路は開かれた。吉松中尉は直に此進路より前進したが敵陣地前十數米に迫り非常な苦戦の状態に陥つた、このとき第三大隊に在つた装甲車が應援に來つて敵陣地前に突進し其二挺の重

中隊長左
翼に迂回す

機銃は火を吐いて敵を掃射した。此時匍子路方面に向つた山仲（傳吉）中隊長は虬江路方面の戦闘危急なりと聞いて指揮小隊（長特務少尉本田又八）及第三小隊（長特務少尉神谷濱次郎）の二個分隊を率ゐて馳せ付けた。中隊長は自ら前線に進出し中隊を指揮し敵を攻撃せんとしたが敵は土囊陣地に據り瞰射するに對し我には一の土囊も有しなかつた爲、敵の防禦銃火に曝露するより外なき狀況であつた、従つて何等進出打開の途も講ずることが出来なかつた。

そこで山仲中隊長は自ら約二ヶ分隊を率ゐ、且つ第二小隊（長坂口特務少尉）に命じて左翼方面より迂回して敵

昭和十三年三月十日 花崎納

の側背に出でしめた、然るに第二小隊は敵装甲列車砲並に北河南路踏切附近の敵と對抗することとなり、中隊長は自ら二個分隊を率ゐる鐵道線路に進出した、虬江路正面に在つては尙一臺の装甲車來援し都合二台にて敵陣に肉迫し猛射を加へ、其勢に乗して第一小隊は敵の前進土囊陣地を占領した、このとき装甲車の發せる燒夷彈は敵の據れる家屋に命中し火災を起したので炎々として焔は昇り四邊を白晝の如くならしめた。

左翼に迂回した山仲中隊長は此の機を逸せず、線路に進出し突撃を命じた、信號兵は嚙呖たる突撃の號音を奏し、正面側面相呼應して突撃に移り各兵は勇氣百倍して敵を

平定縣戰史編纂部編纂
花崎納

2461

面 鞆子路方

屠り遂に之を占領した、時に午前三時十五分であつた。

第二中隊長（山仲（傳吉）中尉）は指揮小隊（長特務少尉本田又八）第三小隊（長特務少尉神谷濱次郎）及装甲車一台を率ゐてアイシス附近の待機位置を出發し北四川路を南下して鞆子路に右折し前進中、虬江路方面苦戦中なりとの報告に接し、河南路方面へは第三小隊長（神谷（濱次郎）特務少尉）の率ゆる二ヶ分隊を進出せしめ、中隊長は自ら指揮小隊及第三小隊の二ヶ分隊を率ゐて虬江路方面に馳せて行つた。

北河南路に進出した第三小隊長は租界境界鐵門の固く鎖されあるに會ひ停車場方面に進出する能はざるを知り、

平定縣志 卷之 北略納

此地點を防備して我が最左翼の據點とし且つ北停車場方面の敵を脅威せんと欲し午前一時三十分頃陸戦隊本部より到着せる土囊を以て鐵門内方に陣地を構築^{すべく}着手し約三十分を費して之を終つた、我陣地は既に成り我隊は備^{士満}を持して敵を俟つたが午前三時頃實山路及北停車場附近より攻撃し來りたる敵に對し猛烈なる射撃を加へて之を撃退した、午前六時十五分に至つて虬江路方面より第一第二分隊は歸還して第三小隊は集結するを得たが、次て午前六時四十五分に至つて命令により陣地を北河南路と鞆子路との三又路に移した、午后二時に至つて大井陸戦隊第一小隊（長中尉平田春生）が應援の爲め來着した。

軍令部
戦史部
編纂部
花時納

天_ト同_ト路_口
方
面

〔附記〕此陣地は三十日午前再び大隊命令によつて鐵門附近に移し、更に同日正午鮎島指揮官巡視のとき後退を命せられ鮎子路端に移した、後二月二日に至り北河南路の守備を義勇隊に引繼ぐこととなり更に後退して鮎子路、北江西路の^{交叉点}十字路に移して、三月二日に至つた。

第六區の警備に任せられた第二大隊長（大尉多田佐七郎）は第四中隊（長中尉半井安太郎）を率ゐ二十八日午後十一時^公大^ダ第二社宅を發し十一時三十七分待機位置たる^茨茨^ノ思^シ威^イ路^ロ上天同路との交叉點に到着した、午前〇時〇分進發の命と共に第四中隊第一小隊長（吉津

軍令 戦中 戦後 史料 北 戦 納

政門特務
少尉狙撃
せらる。

(信一)中尉)は尖兵長として第一第二分隊及機銃第一
第二分隊を率ゐ天同路を東進し第五公安局の門前に至つ
た。このとき公安隊の一部は我に反抗の氣勢を示し拳銃
を發し門附近に在つた政門(清市)特務少尉及光石(秀
雄)一水を傷けたので吉澤中尉は直に巡捕の武装解除を
命じた。かくて吉澤小隊は公安局を占據し之を哨所とし
て虹口クリークの線に進出し、午前一時三十分天^同路と通
州路を通する石橋を、次て香凛橋を破壊し第六區の東側
警戒線を確保することが出来た。

第三小隊(長兵曹長井上進二)は第六區内部の便衣隊掃
蕩の任に當り公肇學堂其他に據りし抗日義勇軍或は便衣

軍 戦史編年 昭和乙 九時納

隊を撃退して其の警戒に任じた

三、最初の停戦

一月二十九日事變勃發の當日午後八時彼我停戦の約成り第一遣外艦隊司令官は一時戦闘を中止すべき旨を令達するところがあつた。蛟島陸戦隊指揮官は此命令に基き之を各部隊に傳達すると同時に警備區域の警戒を嚴にし若し治安を妨害する行動に對しては之を嚴重に取締ると共に敵が攻撃動作に出でざる限り我より進んで戦闘行爲を爲すべからざる旨を命令した。

然るに翌三十日午前二時頃に至り敵は約を破り機銃を以て我陣地の射撃を開始し、更に午前六時二十分に至りて

軍令部戦史編纂所稿紙乙（花崎納）